

ネパールから帰国の医師が会見



先月、ネパールで起きた大地震を受け現地で医療支援を行ってきた長崎大学の教授が12日記者会見し、現地の診療所では対応しきれない重傷の患者の受け入れ先の整備などを含め、継続的な医療支援の必要性を訴えました。

先月25日、ネパールで起きた大地震ではこれまでに周辺国とあわせて8000人以上が亡くなりました。

被災地を支援するため、長崎大学が派遣した医師で熱帯医学研究所の山本太郎教授が12日、大学で記者会見し、先月30日から5日間行った医療支援活動について説明しました。

山本教授は首都・カトマンズから100キロほど北東の山間部の町にある仮設の診療所に赴き、治療の優先順位を判断するトリアージの導入を指導したり、患者に安全な飲み水の確保や手洗いやうがいなどでの清潔な衛生状態で保持することなどを指導したということです。

この診療所には毎日、骨折や打撲などを負った数十人の患者が訪れていたということですが、山本教授は「歩いてしか行けない山あいの集落が多く、被害についての全体状況の把握は困難だった」と述べました。

さらに山本教授は、「今の段階で重要なのは被災者の命を救うことと生活の質を改善することですが、今後必要となってくるのは、国際社会による継続した支援だと思います」と述べ、仮設の診療所では対応しきれない重傷患者の受け入れ先となる医療機関の整備などを含め、継続的な支援の必要性を訴えました。